

十字路

十字路

昭和三十九年十一月十日 発行

定価 六八〇円

著者 江崎 誠致 ©

発行者 上林 吾郎

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四

印刷 大日本印刷
製本 中島製本
製函 文京紙器

Printed in Japan

十字路

江崎誠致

文藝春秋新社

目次

第一部 七

第二部 二四

第三部 三

裝幀
新本
燦
根

十字路

第一部

第一章

渋谷駅前広場。

停車中の新橋行都電の後窓から、車掌が上体を弓なりにのけぞらせてパンタグラフをあげた。

福田正夫は、国電の改札口を出たとき、その火花に気づくと、おや、という表情をして足をとめた。しかしすぐ、視線を暮れかけた空に向けたまま、都電のりばの方へ歩きだした。地図の形をした夕焼雲に、肋骨状の電線がくつきりと緯度を刻んでいた。

この日は、朝鮮戦争がはじまって丁度二十日目、三十八度線を越えて南進する北鮮軍は、まもなく三十六度線を突破しそうな勢いを示していた。この割で進撃がつづけば、あと十五日で南北の境界は海に消える……正夫は、雲と電

線のいたずらな景色に、隣国の動乱終結の日を思いえがいた。

正夫は戦争を怖れていた。五年前、太平洋戦争の直中に身を置いたときとはちがつて、直接生命の危険をおぼえる出来事ではなかったが、彼の属する組織はそのあおりをくって思わぬ混乱におちいり、彼自身もまた去就に迷っていたからだ。これから何がおころうとしているのか。彼はふと、あたりを歩きかう人の足音や、自動車の警笛や、ガードの上を走り去る国電の響きが、間近にせまった敵のどよめきに聞えた。

新橋行都電の乗車が終り、発車のベルが鳴りだした。車掌は、突っ立ったまま空を仰いでいる正夫に、うさみくきそうな一瞥を投げると、軽い舌打ちをしてドアを閉めた。乗客なかどうか理解に苦しむ彼の姿勢が、過労のためとがった車掌の神経を刺激したのにちがひなかった。

電車が出ていったあと、正夫は国電改札口の時計に視線を移した。六時十五分。つづいて彼は背広の袖をまくって腕時計を見た。正確に六時十五分を指していた。定められた時間は七時、ここから目的の家まで三十分かかるとみて、今の電車では早く着きすぎるのだ。次の電車でも、まだ早すぎるかもしれない。正夫は腕組みをしてあたりを眺めま

わした。

忠犬ハチ公のまわりに、はやばやと^{あうやく}遊弋をはじめた淫売女や飲屋の客引き、チンピラ愚連隊や闇ブローカー、パクリ屋タイプの男など、怪しげな雰囲気をただよわせた連中の姿があった。おびただしい通行人は、ある旋律をともなつた渦巻きのように揺れながら、広場を渡つては繁華街の方へ流れ出て、また駅の構内へ吸いこまれていた。

不意に、正夫の背後から、騒々しい鈴の音をひびかせ、背の低いがぐり頭の鉢が異様にひらいた男が、広場の中央に飛びだしてきた。いでたちは、ランニングシャツに猿股、むきだしになつた真黒な手足がひどく猥褻な感じをあたえた。

「号外！ 号外！ 弾圧だ！ 弾圧だ！」

男は、前後左右に体を振り跳ねまわつて絶叫した。腰の荒縄にぶらさげた鈴の束が、狂つたように反転してあたりの物音を圧した。いかに戦後とはいえ、ラジオが発達した社会に号外の必要はほとんどない。インチキ新聞の金もうけたと誰にもわかつたが、その男のとつぴな運動が居あわせた人々の関心を集めた。

「おい、とっちゃん坊や、何の弾圧だ？」

ハチ公を背に煙草をふかしていた半長靴の闇屋らしい男

が、目を輝やかせ、敏捷に近づいて声をかけた。

「弾圧だ！ 弾圧だ！ 号外号外！」

男は闇屋の相手にならず、飛びあがっては大声でわめきつづけた。

「すつとんきような野郎だ。いくらだ？」

「十円だ十円だ！ 弾圧だ弾圧だ！」

「ちよつ、こいつ……俺が弾圧してるみてえじゃねえか。」

闇屋はなかば本気で腹を立てながら、ズボンのポケットから金をつまみだすと、男からひったくるようにして号外を受けとつた。

「どうせ、いいかげんな話だろう。」

「ほんとだ、ほんとだ！ 弾圧だ！ 弾圧だ！」

「この、びきたん……」

闇屋は悪態をつき、十円の代償に男の頭をこつんとやろうとした。

「弾圧だ！ 弾圧だ！」

一瞬、男は一閃ばかり飛びさがっていた。それをしおに、次々と号外は売れだした。男は何枚か売れるたびに少しづつ場所を移動しては、きてれつな踊りをくりかえした。

「一枚くれ。」

買うつもりではなかった正夫まで、男がすぐ前に来たと

き、思わず笑いだして十円玉をとりだした。

「徳田氏ら九名に逮捕状」

見出しの活字が馬鹿に大きかった。それだけわかれば、あとは読むまでもなかった。去る六月六日、マックアーサーによって公職追放の指令をうけた共産党中央委員の一部が、地下に潜行したことは天下周知の事実であつたし、そのうち法務府特審局の出頭要求に応じない九名の幹部が、団体等規正令第十条違反として告発されるのは時間の問題だったからだ。

したがって、〈ブル新〉でさえもないインチキ新聞の号外だったのが、デマだとは思えなかった。だが、いずれにせよ破天荒のニュースではない。正夫は号外をポケットにねじこみ、新たに入ってきた新橋行都電に乗車するため、行列のうしろにならんだ。急にあたりが静かになった。ふりかえると、いま一騒動まきおこし、わずかの時間で三百円は稼いだにちがいない号外売りが、腰の鈴を手でおさえ、人混みにまぎれて繁華街の方へ消えて行くところだった。もう、誰もその後姿に関心を払っているものは見あたらなかった。

都電の車内は、ラッシュ時の逆コースのため比較的空いていて、乗降口の近くに立った正夫の位置から、全体が見

渡せた。男性はほとんどが開襟シャツかワイシャツの袖まくり姿で、背広をきている客は数えるほどしかいなかった。彼は自分の背広姿が人目についているような気がして、窓際の手すりに体を寄せた。

電車は国電のガードをくぐり、宮益坂をのぼりはじめた。ヒュンと風を切って、黒塗りの外車が駆けぬけていった。その車に乗っていた米軍人の将官らしい徽章が、窓ごしにちらりと正夫の視線に入った。

——あの男は決して死なない——

そのまま、正夫は目立たぬよう身構えて外を睨んだ。こんど米軍の軍用車がきたら唾を吐きかけてやろう。しかし、軍用車はやってこなかった。かわりに、お尻に煙突を立てた木炭タグシーが姿をあらわした。驚いたことに、そいつは後から追いあげてきたのではなく、電車に追いぬかれているところだった。ポッポッポッポッ……ハンドルを握りしめて前方を見すえた連ちゃんへの悔いそうな表情が真下に見え、次第に後へさがった。競争をするつもりでアクセルを踏んでいるのだ。正夫の顔にふっと微笑がのびた。

同時に、すぐ横に立っていた勤人風の二人連れの一人の言葉が、彼の耳に錐のようにつきささった。

「共産党だな。」

正夫は瞬間全身を緊張させたが、すぐ自分に向けられた言葉ではないとわかって、さとられぬよう溜息を吐いた。

「あれが……共産党の自動車かね？」

「いや、自動車の共産党さ。」

「何だ……」

「そんなもの、持ってるわけないだろう。」

「だからさ……しかし、自動車の共産党はよかったな。」

「ガタガタするばかりで役に立たん。」

正夫は、笑いあっている二人の蒙をひらいてやりたい誘惑をおぼえた。第一、党には二台幹部用の自動車がある。

それはたしかにガタガタのおんぼろで、いま電車に追いつめられた木炭タクシーと似たりよつたりの代物だが、大いに役には立っている。前に二度ほど便乗した彼の経験によれば、登り坂でなければ結構スピードは出るものだ。

もちろん、正夫は求められても、そんな講釈をするわけにはいかなかった。そこで彼は、二人の会話を盗み聞きすることに神経を集中した。共産党という言葉が出た以上、話は潜行幹部のことにおよぶにきまっていたからだ。

「いよいよ逮捕状が出たね。」

先刻の号外を見たのか、ラジオ放送で聞いたのか、二人は九幹部に逮捕状が出たことを知っていた。

「ああ、十八年はいってきてまたか……とにかくぐくろうなこつだ。」

「好きなんだろう。」

「監獄が？ まさか……もつともこんどはなかなかつかまらんよ。」

「そうかね。しかしどうかな。」

「これがあるからね。」

いましがた、自動車など持っているわけではないだろうと言った男が、親指と人差指で丸い輪をつくった。

「そうかね、無いんじゃないのか？」

「冗談じゃない。ソ連に本部があるんだもの、無限だよ。だから俺はなかなかつかまらんとするな。泥棒だってゼニ持ってるうちは逃げまわってるだろう、つかまるときはたいてい素寒貧になったときだよ。あれと同じさ。」

「しかし有名な連中だもの。見つけられるよ。」

「いやいや、実はね……」

ソ連援助派の男は、そこで声をおとしてひそひそ話に移った。どこかで仕入れた秘密情報なのであるが、話の程度から判断して、愚にもつかぬ内容であることはまちがいないかった。

正夫が二人の会話に興味を失いかけたとき、薄笑いをう

かべて頷いていた相手の男が、普通の声で反論をのべた。
「そうかもしれないけど、一人や二人は一ト月もすればつかまるよ。いくら組織があつたつて、警察はそれが商売だもの。」

「いやいや、賭けてもいい。」

「もし、じゃ一ト月うちに誰かつかまったら坊主になれ。」

つかまらなかつたら俺が……」

「坊主じゃつまらん。」

「じゃ、何を賭ける？」

「こういうのはどうだい……」

また、逮捕不可能説の男が、相手の耳もとに口をよせた。

「こいつ、ほんとうか？……」

二人は下卑た笑いをたてながら、互いに肘をつつきあつた。〈女房にキスをさせる〉そんな賭けが成立したようを感じだった。

正夫は二人の愉快そうな態度を、どう考えたらよいものかとまどいをおぼえた。五年前までの戦争では、左翼も右翼も一般市民も、歯を食いしばり^{またり}眈^{またり}を決し、意図するところはちがつてもとにかくみな戦わねばならなかった。しかしこんどは、隣国の戦乱とはいえ、体を張って抵抗をこころみよとする共産党のような組織もあれば、その組織

の動きに賭けをして楽しむ民衆もいる。

へたたかいは人民の信頼のもとに——姿を消した書記長の言葉が、つづいて、信念、規律、意識、団結、闘争等々、共産党用語が雄然と正夫の脳裏に浮かんできた。だが、ここでは、その信頼さるべき人民が、彼等を信頼する指導者の逮捕について賭けをやっているのだ。「そんなことを考えるのは敗北主義だな。それはあんたが組織労働者を知らないからですよ。低いなあ、意識が……」オルグはまちがひなくそう言うだろう。正夫は非公然の党籍を得て三年になるが、似たような説教をくりかえし聞かされてきた。たしかに彼はこれといった闘争歴一つ持たぬ未熟な党員だった。したがってそうした批判には、悪意がないかぎり素直に肯定しようと努力してきた。

しかし……正夫はさりげなく車内の人々を見まわした。どこに、組織労働者が、信頼すべき人民がいるのだろうか。

「戦争つていやねえ。」それも小さな声で呟きそうな婦人が二三人、あとはみなどこ吹く風だ。決して賭け屋だけがへそまがりの酔狂ものとは思えない。彼等は己が身辺雑事に頭を悩ましているだけではないのか。

いや、あるいはこの車内にも、党員がいるかもしれない。それも、昨日連絡に來たような青年が……だが、もしそれ

がきわめつきの筋金入りであれば、彼は全身を神経にして、車内の全人民に警戒心をかきたてていることだろう。すると、スパイや尾行者がどこにいるかわからない彼にとって、それが当然の構えであつても、そこに信頼が存在しないことは事実ではないか。

「矛盾論」を読むといいんじゃないかな。」オルグの言葉が聞えるようだ。「読んだよ。」「だったらわかるでしょう。」「わかるから困るんでね。」オルグは首をかしげる。「要するに、ヒューマニズムがひ弱なんだな。」「気易く言いなさんな。」「しかしそうですよ。労働者の感覚があんたは稀薄なんだ。」「それは認める」「『実践論』を読むといい。」「読んだよ。」「オルグの顔が和む。」「ま、あとは実践を通じて……」「ひ弱なヒューマニズムは鍛えられるか。」「

どうも今日は少しおかしい。正夫は軽く頭をふつて、窓外に視線を移した。電車は六本木の四辻を渡つてスピードをあげた。夕闇がせまっていた。あたりは都心にもかかわらず、復興がおくれている地帯だった。バラックの家並の合間に、建築準備中の空地であらう、何か所も粗末な板囲いが目にとまつた。彼は次の停留所で下車するため、車体の振動に調子をあわせて乗降口に移動した。

安全地帯に降り立ったとき、正夫の脳裏から先刻の妄念

はあとかたもなく消え、激しい緊張感だけが全身にみなぎっていた。彼は腰をかがめて靴の紐をていねいに結びなおした。五六人一緒に降りた人たちをやりすごすための動作だった。彼は立ちあがる前、これから自分が行こうとする方向へ向かったのが、子供の手を引いた婦人だけであることをたしかめた。

正夫は、誰にあつて何をするのか知らなかった。わかつてるのは、すぐこの先のアジトに、岩手という人物が自分を待っているということだった。前日、係のオルグに呼ばれて行つた日本橋の喫茶店で、同席した屈強な背広を着た青年を通じて、今日の行動が指定されたのだ。

「何をするのかいな。」「

そのとき、正夫は青年が示した掌大の小さな薄い紙片を見ながら、オルグにたずねた。

「さあ、とにかく見こまれたことはたしかだね。」「

「おぼえましたか?」「

青年が、横から低いがきびしい声でたずねた。正夫は少しふざけかけんの口をきいてはいたが、重要な用件であることぐらいわかつていたから、いかげんな気持ちでいたわけではなかった。

「ああ。」「

間髪を入れず、正夫は紙片を青年に突きかえた。オルグは口をはさもうとしたが思いとどまった。青年が正夫の態度に何の反応も示さなかったからだ。青年は煙草をくわえてマツチを擦り、つづいて灰皿に入れた紙片に点火した。ポツ、と一燃えて地図はあとかたもなく消えてしまった。

「それじゃ、僕はお先に……」

職責を果たした青年は、人なつっこい笑顔を正夫に向けて喫茶店を出ていった。

「腹立てなかったのかな。」

「そんな小さなことにこだわりはしませんよ。ああいう仕事をやらされているんだから、とにかくえりぬきだもの。」

オルグは得意そうだった。

「そうだね。ちよいと、俺の方が子供みたいなあんばいだった。」

「まあ、気にしないでいいですよ。ほんとの労働者的黨員は楽天的で……」

「しかも警戒心旺盛でだ。わかってるよ。それより、いったい何事かね？」

「全然、知りません。」

正夫は、何で呼ばれるのか、およその輪郭ぐらいはつかんでおきたかったが、オルグが知らないのではどうしよう

もなかった。

そうして、一日がたち、いま正夫はあと少し足を運べば、指定されたアジトに達する地点まできたところだった。道順は正確に暗記していた。都電の進行方向に向かって二つ目を左、すぐ右、そして三つ目を左、畑があつて突きあたりが崖、その崖つぶちの左側に、〈××図案研究所〉という立看板がある。その図案研究所に、岩手と名乗る人物が待っているのだ。彼はその研究所の名前は失念していたが、別に差支えることはなかった。

電車通りから、二つ目の横丁を左へ曲ったところで、正夫は腕時計をのぞいてみた。七時十分前だった。五分ばかり早く着きそうだが、その程度ならかまわないと判断して、先へ進んだ。夕闇がたれこめ、次の角を曲ったとき、石ころにつまずいて足音をたてた。人通りがないだけに、無気味な響きが露路いっぱいにこだました。

街灯はどこにもなかった。まだ、真つ暗とまではいかない夕闇の中を、正夫は無事に畑のある地点に達した。ところがそこで、彼の全身は一瞬ちぢこまった。何気なく進もうとしたすぐ前に、ランニングシャツにズボン姿の男が、ぬっと突っ立っていたのだ。食後の散歩姿とも考えられたが、人を待ちぶせていたような感じでもあった。一秒のう